九州の歴史と文化を楽しむ会　　2016年9月22日

建国の過程を記録した山々

白崎　勝

１、はじめに

日本には名前のある山が多くあり、数は１９、０００山を超えています。その名前に同じ名のものや、良く似た名前が多くある不思議は、誰もが思ったことがあるでしょう。調べると、その同名同種の山々に、紙では記録できなかった、古代の建国の過程を記録したものが、あることが分かりました。この建国の記録と思われる、山々を調べてきた結果を発表します。

２、調査方法

１）調査した山

山はその麓の違いにより別名で呼ばれることがあります。ここでは国土地理院地図に記載された山名で調査しました。地元でのみ呼ばれる山名も検証の上、採用しています。

２）調査方法

- 二つの同名の山が対に置かれているようであれば、東征などの進攻方向か、その先、あるいは中間の何を指しはさんでいるか地図で確認し、記紀の記述と比較しました。
- 同名の山が多数あれば地図にプロットし、互いに結んでみて東征の進攻経路か検証しました。あるいは遺跡や伝承との関係の有無を調べました。
- 調査対象の山々を訪ね、山が良く見える場所に立ってみました。そして地形や街道、鉱物の産出、神社、地名とのかかわりについて調べました。山奥の山では、古い集落の有無を調べ、古代の山名が残される環境だったかを調査しました。

３、調査結果の概要

山々に記録された内容は、進んだ方向や、領域、通過した峠など様々でした。その山名からその場の様々な感情を読むとることができました。日本建国の過程は、古事記・日本書紀が記す建国の過程と同じで、その記録を実証すると同時に、それ以上のことが分かってきました。

地名も定かでない時代であったので、多岐にわたる東征や遠征の経路を十分に記録できなかったのでしょう。古代人は、そのことを十分に承知していて、この山名への記録を計画したと思われます。

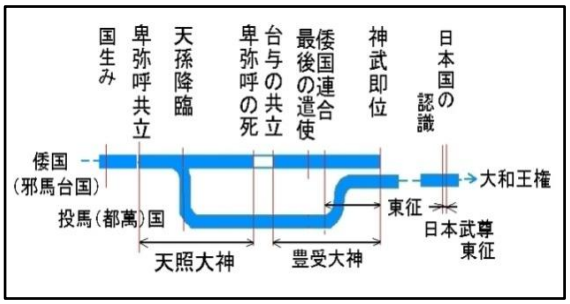


図１　日本建国のフロー

図１は調べてきた建国の過程を表したものです。概要を述べると次の通りです。

1） 魏志倭人伝が記す倭国乱を収束させるための「別天つ神五柱」の話し合いから、日本の記録する歴史は始まりました。

2） 「別天つ神五柱」は、伊邪那岐・伊邪那美を国生みという名の、東方開拓に船で出発させました。

3） 倭国乱で戦った伊都国の皇子・伊邪那岐と、奴(那)国の王女・伊邪那美が結婚し、生まれた子を、統一倭国の王とすることは話し合いで、すでに決められていたことでした。国生みの中で生まれた天照大神こと卑弥呼が供立されました。

4） 天照大神の孫の邇邇藝命は、天孫降臨という名の開拓を南九州の日向・薩摩・大隅で行い、投馬（都萬）国を建国しました。

5） 卑弥呼の死が西歴 248 年頃であることから推測して、伊邪那岐・伊邪那美の国生みへの出発は、100 年代後半だったと推測します。

6） 卑弥呼の跡を継いだ、台与（豊受大神）は、伊邪那美の死の原因である火之迦具土神の孫に当たる伊都国の王家筋の娘でした。

7） 投馬国も神武兄弟の時代になって、東アジアの情勢変化や神武兄弟の年齢など東征の条件がそろいました。そこで兄弟は邪馬台国にある高天原に出向き、豊受大神と相談し東征を決めました。

8） 神武兄弟が主体となって東征を行いますが、豊受大神もその後を追います。豊受大神は神武が困っている時は、神剣を届ける使者や、八咫烏を派遣して励ましました。神武を大王に推戴し橿原で即位すると、自分は丹波に身を引きました。

9） 強力な大和王権が誕生し、12 代景行天皇の時代になり、王子の日本武尊が東日本を巡る、遠征を行います。

１０） その遠征の中、富士山の素晴らしさに感動し、富士山こそ「日本中央」の認識を得ます。そして、東征が終わった段階で、国号を倭国から「日本国」に変更することを決断し、その認識を残す努力を始めました。

このように、国生みに始まる建国の歴史は、遠征や航海、天孫降臨など旅の出来事が多いため、山々の名前や位置に記録しやすい面がありました。その記録が日本武尊東征まで続いていたことから、ここまでが一連の建国の過程と認識していたことが分かります。

４、国生みの記録

表１

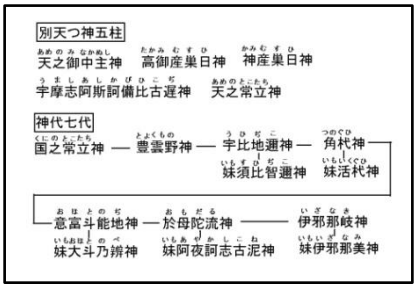


表１は古事記が最初に記す「別天つ神五柱」と「神代七代」です。ここから日本の歴史は記録され始めました。表２は伊邪那岐・伊邪那美の一文字が、魏使倭人伝に登場するクニ名から一文字ずつ採った名であることを示したものです。

伊邪那美・岐の文字順は、対応するクニの格順でした。伊都国がトップの国で、邪馬台国は格順２の国です。クニの代表欄は、倭国乱を収束する話し合いに参加した、五つのクニの代表でした。「別天つ神五柱」の神々で、古事記の記載順で伊邪那美・岐と対応することが分かりました。邪馬台国の王は高御産巣日神です。奴(那)国の王が神産巣日神だったことが分かります。所在地不明の邪馬台国以外

は、博多湾沿岸に比定されています。倭国乱は北九州での出来事と思われ、邪馬台国のみが、遠く近畿から話し合いに参加することはあり得ません。邪馬台国は筑紫平野にあったことが分かります。

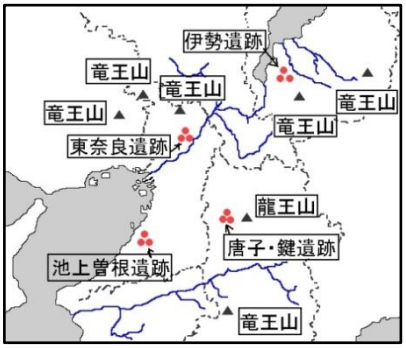
表２

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巣日神
那	奴（那）国	神産巣日神
美	不弥（宇美）国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壱岐国	天之常立神

国生みでの伊邪那岐・伊邪那美の東進は、綿津見三神による船で３方向に進んだと考えます。大八州など沢山の島に名前を付けました。この島を島と認識するためには１周しなければなりません。それか、二人が右左に進み、どこかで出会うことが必要です。

記紀が記すように伊邪那岐は左回りに瀬戸内海を進み、伊邪那美は四国を右回りに進み、二人はおのころ島の比定地、沼島付近で再会したと考えます。瀬戸内海航路の方が短く、沼島付近で伊邪那岐が伊邪那美を、待ち受けていたと思われます。伊邪那美はその再会に感動し思わず自分から先に、伊邪那岐にプロポーズしたと思われます。

国生みは開拓という名の東方進出でした。その国生みの順は、記紀ではいろいろです。そのことから、同時並行的に場所を変えながら取り組んだことが想像できます。



この国生みを二つの竜王山に記録されていることが見えてきました。図は近畿の大きな弥生遺跡を、3 点丸で示しています。それぞれの遺跡を見下ろすように竜王山が置かれています。奈良盆地の唐古鍵遺跡では真東に龍王山が見つかります。

竜王は山幸彦の妃、豊玉姫の父、豊玉彦のことです。国生み時代の人ではないが、海神あるいは綿津見神と呼ばれた彼は、邇邇藝と同世代にあたり山幸彦から、国生みを記録するよう依頼され足跡を訪ね竜王山を残したと考えます。

図は近畿の状況ですが、四国、吉備をみても同じ状況です。

国生みの中での最大の、出来事は伊邪那美の死です。その実態が見えてきました。

葬った場所の記録は、２ケ所あります、その一つ熊野の「花の窟」のある山が、竜宮山でした。また近くの産田神社には、伊邪那美と迦具土神が祀られていました。伊邪那美はここで、住居か衣に火が付くなどの事故があったと思われます。

この時、伊邪那岐は猪名川の上流にいたようで、そこにも竜宮山が残されています。

急遽、熊野の諸手船で、伊邪那美を阿波に運ぶことになりました。その様子が熊野速玉大社の御船祭りとして遺されていました。船の

舳先に、赤い衣装の人が「ハリハリセー」と声をかけ、前方を指さすしぐさをします。これは火之迦具土神が、船で伊邪那美を運ぶできごとの伝承と考えます。この船には稚児像が乗せられます。宝物館にその像が展示されていました。

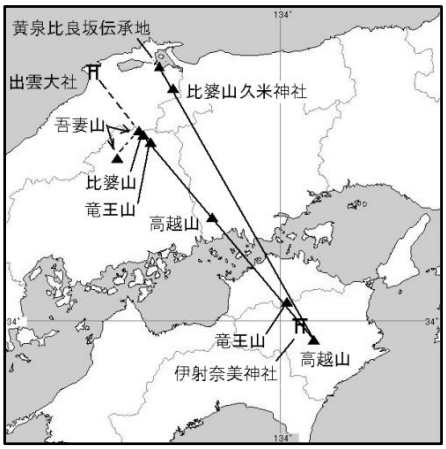
伊邪那美は熊野へ、末子の須佐之男を連れてやってきていたようです。突然の事故に、須佐之男も必死に船を漕ぎますが、伊邪那美は手当の甲斐無く、船で亡くなったと思われます。

伊邪那岐に、伊邪那美の事故の知らせが届き、急ぎ戻ってきましたが、すでに「もがり」が行われている中でした。もがりの場所は、徳島県吉野川市山川町にある天神社の境内だったと思われます。その後、近くの高越山に葬られました。

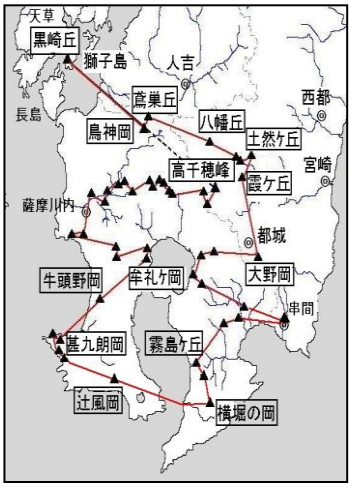
伊邪那美のよみがえりを待っていた、待ちきれず伊邪那岐はついに伊邪那美が葬られた高越山に向かいました。

この時、室を見てしまった伊邪那岐は、又、もがりの山川に戻れば、伊邪那美を諦めきれない弱虫に戻ると考え、山を越えることにしました。鳴き沢女に追われるなど大変な逃避のすえ、阿南の橘の青木まで来て、禊しました。

このまま、倭国に戻れば、禊までして逃げ返った薄情な男の誹りは免れません。伊邪那岐は吉備の開拓を始めています。その時、比婆山に陵をこしらえています。そのことは、もう一つの高越山を岡山県の井原に置いて記録していました。また二つの竜王山と二つの吾妻山でも記録していました。



５、天孫降臨の記録

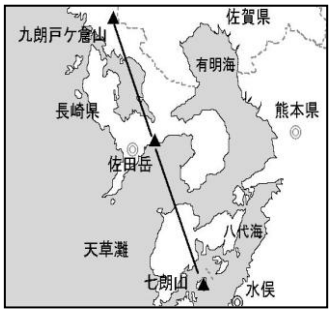


邇邇藝命による南九州への天孫降臨は、○○丘と○○岡という二つの「おか」を用いて記録していました。

邪馬台国の高天原を出発した、少年の邇邇藝は阿蘇を越え新しい国の入口、高千穂町で国見が丘を名づけています。西都で日向の開拓を行う間に成長し、青年となった邇邇藝は薩摩・大隅の天孫降臨の遠征を行います。

まず、高千穂峰に登り、その後、薩摩半島を巡り大隅半島と、逆「の」の字型に高千穂峰を一周して、八代海にある獅子島の黒崎丘で終わっていました。

この天孫降臨の遠征が、砂丘の丘と岡山の岡の組み合わせで、七年をかけた遠征であったことが分かりました。灌漑稲作を普及させる旅で、そこには宇都や牟礼の地名が残されていました。



また、天孫降臨を先導した猿田彦と邇邇藝の別れの場所や、終焉の場所までが山で記録されていました。

猿田彦は天孫降臨の旅７年の中の最後の２年を担当して、九州西岸を経て高天原に戻る予定でした。しかし、その旅の中、諫早で亡くなったことが山に記録されていました。

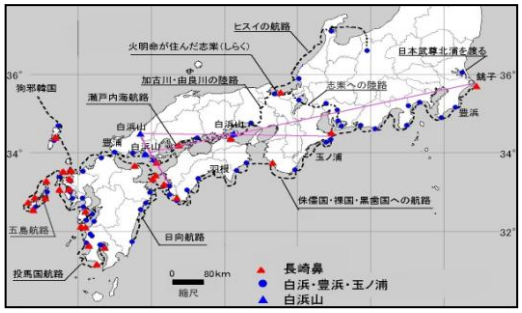
獅子島の七朗山と、佐世保の九朗戸ケ倉山で佐世保の佐田岳を指し挟んでいました。猿田彦の本名は佐田彦で、終焉の地に佐田岳を残し記録したものと思われます。

６、古代航路の記録

竜王とも呼ばれた、海神・豊玉彦は、国生みの記録だけでなく、古代の航路を記録していました。

図は九州西岸に多く見つかる長崎鼻を調べて見つけた、魏志倭人伝が記す投馬国への水行 20 日の航路です。唐津の呼子から陸沿いに長崎鼻が続いていて、投馬国の中心地、鹿児島湾の奥、宮浦宮まで 10 航海の航路でした。それぞれの港には、やってくる船を監視する番所山や遠見山があります。

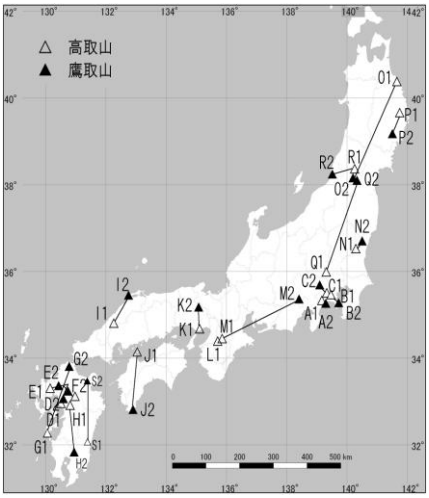
長崎鼻は国内最多の鼻地名で、瀬戸内海沿岸や遠く銚子にまでありました。長崎鼻と長崎鼻の間の寄港地は、白浜であることが分かりました。古代の船は岩礁がある浦には入らず、安全な浜に着岸し船を引き揚げる寄港だったことが分かります。



鳥羽と銚子の長崎鼻を三つの白浜山が指し示していて、このことなどから、魏志倭人伝が記す黒歯国が銚子で、裸国は鳥羽と比定しました。その他、三河湾から舞鶴までの内陸横断の陸路があったことが見えてきました。銚子で産出される砥石などを、最短で届ける街道だったと思われます。

神武東征の記録

神武東征は多人数による大きな東征だったので、その記録は階層的に記録されていました。図は全国の「たかとり山」の分布図です。



全国に同名２種の「たかとり山」が対で配置されていました。奈良より西は、神武東征の記録で、東は日本武尊東征の記録でした。

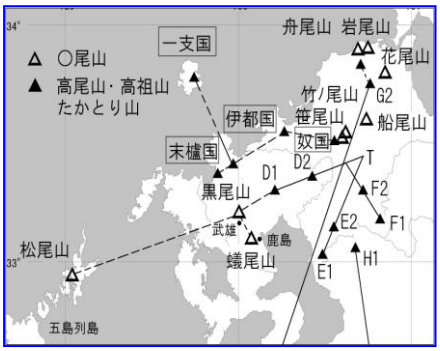
これは、「たか」の一文字を「高い高」から「飛ぶ鷹」に変えて、東征隊が進んだ方向（ベクトル）を記録したものでした。中国・四国・丹波の短いベクトルは、東征隊が西日本の各地に遠征していたことを表しています。

この「たかとり山」は東征の記録で、最上位に位置していると思われます。

九州の分布を拡大すると次の通りです。６対のベクトルが見つかりました。内３対で、朝倉に三角域を形成し、ベクトルＦが高千穂宮で東征を相談したのち、高天原に進み豊受大神と相談したことを記録したものと思います。

ベクトルＤとＥは筑紫平野の人達が、東征のために、朝倉に集合したことを記録したのでしょう。ベクトルＧは、天草、島原の人達も朝倉に集合した後、岡田宮方向に進んだことを記録したのでしょう。

一方、神武はベクトルＨのように熊本を経て投馬国に立ち戻り、東征の準備をしてベクトルＳが示すように出発したのでしょう。記紀が記す東征の最初の行程です。ベクトルＨが熊本を通過していることから、このとき、邪馬台国の南にあった狗奴国との決着の戦いがあったと思われます。



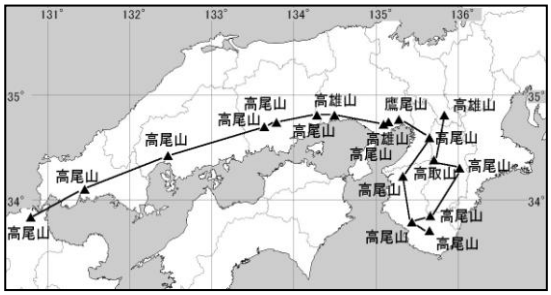
全国の高尾山は、東征の記録の第２層にあたり、大まかなベクトルでは記録できない、東征隊の経路を記録していました。さらに、第３層として「高尾山」の高の一文字を変えた○尾山が、東征途次の出来事や、越えた峠を記録していました。

図は北部九州のベクトル図に、高尾山と○尾山を書き加えた図です。博多湾沿岸のクニの人達が点線のように進み、太宰府付近でベクトルＧの人達に合流したことが分かります。

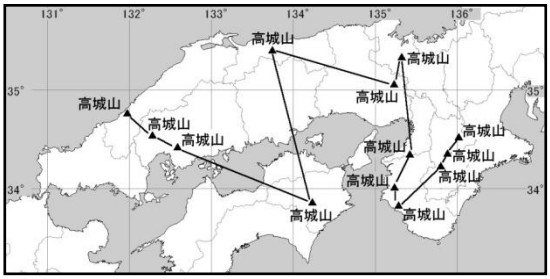
また、五島列島や鹿島、武雄の人たちも、東征に参加したことを記録していました。邪馬台国の東征という表現はあたらず、倭国を挙げての東征であったことが分かります。

図は第２層の高尾山を結んだものです。東征隊の神武隊が、瀬戸内海を進んだ経路を記録したものと思います。吉備と播磨の境にある、雄雌の雄を用いた高雄山は経路の区切りです。芦屋の飛ぶ鷹を用いた鷹尾山は、丹波などに遠征した隊の集合場所です。ここから船で出発し難波の渡が行われたと思います。

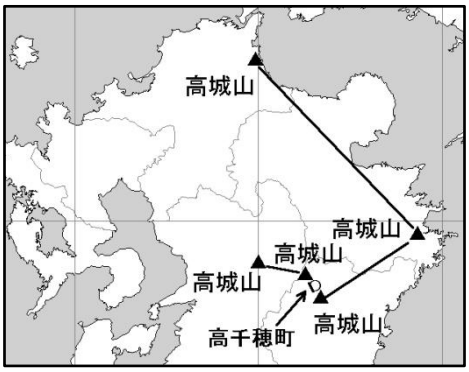
孔舎衛坂で負けて、熊野に回った経路も間違いなく記録しています。最後は宇治付近で終えています。



図は高城山を結んだもので、四国、鳥取、丹波などを経て和歌山から、宇陀に進んだ記録です。また、東征隊の別な遠征隊の記録と思われます。

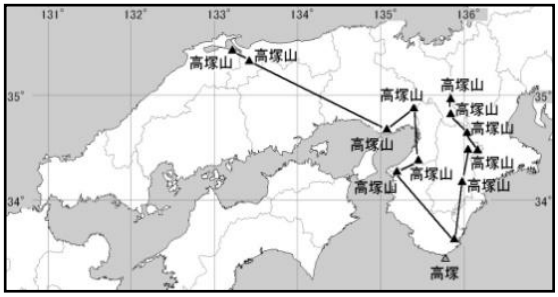


図は九州の高城山を結んだものです。熊本から阿蘇を越えて、一旦、高千穂町を経て佐伯に向かっています。これは熊本平野で狗奴国と戦った部隊が、阿蘇で鉄武器を補充して、佐伯付近で、日向から出発した神武の東征隊と合流した記録と考えます。



図は高塚山を結んだもので、出雲から始まっています。高尾山と同じように熊野に巡り、宇陀から最後は宇治で終わっています。

東征隊の中の別な隊が進んだ経路を、記録したものと思われます。



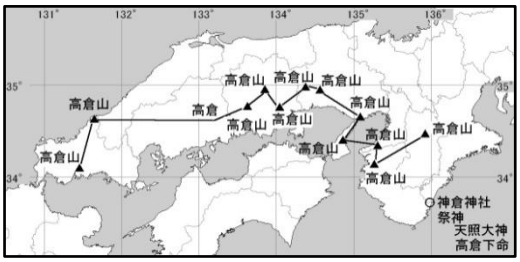
その他の記録の同名の山には、次の山が見つかっています。

① **権現山**　全国に９３の権現山があり、神武東征と日本武尊東征時に名づけられたと思います。奈良より西には約５７あります。全ての意味が分かったわけではありませんが、１例を示すと写真は、神武が船で出発したと伝わる、美々津の港の出口に置かれた権現山です。

② 天神山　全国に３８の天神山があり、うち奈良より西には２６です。写真は奈良の長谷寺付近の初瀬街道脇にあります。神武が宇陀から橿原に入った街道に名づけたと考えました。

③ 明神山　全国に３５あり、うち奈良より西には１３です。神武とは違う東征隊が進んだ隊の経路を残したものと思います。

８、豊受大神東遷の記録



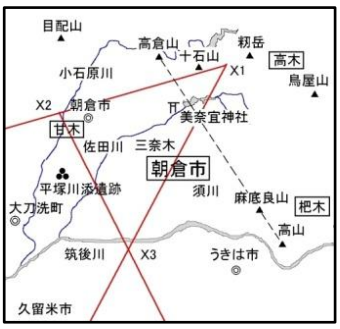
図は山口から奈良の宇陀につながる、高倉山を線で結んだものです。豊受大神が神武東征の後を追った足跡の記録と考えています。孔舎衛坂で戦いが起きると、ここを避け淡路島に迂回しています。その後、和歌山から宇陀に進んだ経路になっています。神武はこの高倉山に登り国見を行ったと、日本書記は記しているが、山は低くとても国見できる山ではありません。ここで、神武と豊受大神が再会し、豊受大神が神武を大王に推戴したところと考えています。

図は九州の高倉山で、二つの対が見つかります。北の二つの高倉山は、天照大御神を祀る麻底良山を指し挟んでいます。南の高倉山は薩摩川内の邇邇藝の陵か、木花之佐久夜比売との出会いの阿多を指し示していると思われます。北に伸ばすとやはり麻底良山を指し示しています。

豊受受大神は東征にあたり、一旦、南九州に下り日向三代に東遷を行う報告と、加護を祈ったものと考えます。

図は九州の高塚山を結んだものです。高天原から高千穂町を経て日向に向かっています。天孫降臨の道と昆同しないように、人吉を経て薩摩に向かっています。豊受大神は女性なので、これをサポートする隊だったと考えます。

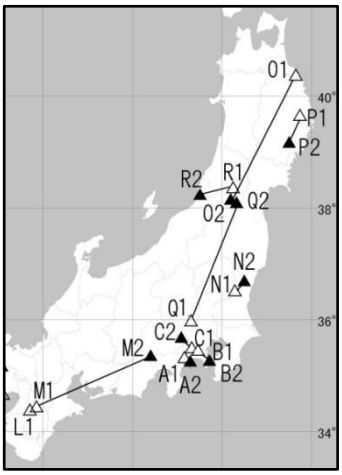
図は「たかとり山」のベクトルが形成する、朝倉の三角領域です。１辺が約10ｋｍあります。中央に三奈木の地名があり、これは三方にある高木、甘木、把木の地名が「高甘把＝高天原」を示唆した地名と思われます。高倉山は三角域の頂点を通過させています。



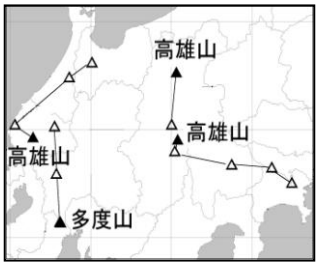
結局、神武を大王に任じた豊受大神は、丹波に身を引き、天照大神に奉斉する余生を送りました。

９、日本武尊東征の記録

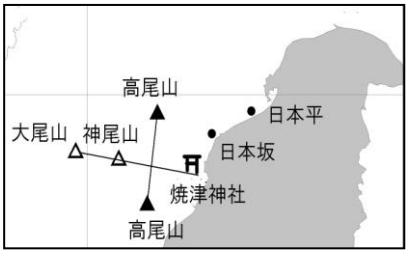
図は東日本の「たかとり山」をプロットしたもので、対と思われる山を結んでいます。日本武尊東征の記録です。奈良を出発し富士山に向かっています。関東平野は２対のベクトルで、２隊が山形方向に進んだことを記録しています。東北の２対は２隊が北から南下しています。日本武尊は三陸沖を船で北上していました。山形付近で合流した後、日本海側に進んだことが分かります。



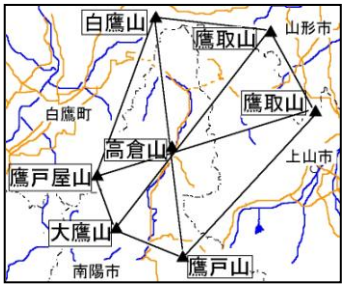
図は、相模で別れた３隊のうちの１隊の、越国に進んだ吉備武彦の足跡を記録しています。高尾山の列が横浜 IC 付近から始まり甲斐、信濃を経て新潟に進んでいます。途中、雄雌の雄を使って経路を区切っていますが、越冬するための、一旦美濃に南下したりしたので、表現を工夫しています。最後は揖斐付近で越冬し、伊吹に向かう日本武尊と合流しています。



日本武尊東征では、さまざまな試練が待ち受けますが、図は焼津で火に取り囲まれて、草薙剣で脱出した場所を二つの〇尾山で指し示しています。その文字から大いなる神の力で、難を逃れたと読み取れます。二つの高尾山は大井川を渡った場所を指し挟んでいます。今の蓬莱橋付近です。



日本武尊東征は様々な事柄を記録していますが、図は山形県の白鷹町付近にある六つの鷹が付く山を結んだものです。そのうち二つはベクトルに使用されています。六つの対山を結ぶと一点に交わり高倉山があります。ここは江戸時代に金を産出したところです。 鷹戸屋山は朝倉にある鳥屋山の同種の山と思われ、良く似た名の戸屋山や高戸山が全国に 42 見つかりました。



図は、日本武尊が最上川を川下りして、庄内平野に進んだ記録です。高倉山と〇尾山をＬ字型に配置しています。右の直線は最上川の支流、小国川が合流する地点を指し挟み、高倉山の木を切り出し、川下りの船を造った場所を記録しています。左の直線は舟下りして酒田方向に進んだことと、最上川と交差した地点で、船を下りたことが記録されています。

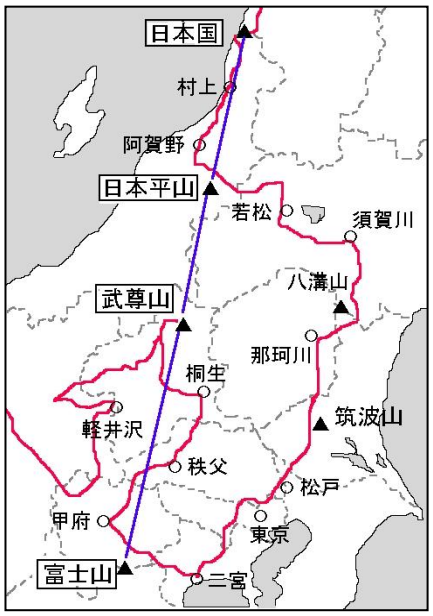
１０、日本国認識の記録

日本武尊は静岡市の日本坂の峠に立った時、富士山こそ「ひのもとの中央」と認識し、そこを日本坂と記録しています。その後、日本平に登り、日本の平和を願った日本平と名付けています。

この時、自分の名も「倭の建」から「日本の武」に変更したと考えます。

船で三陸沖を北上した日本武尊は、東征折り返し地点のむつ湾が見える東北町の石坂に「日本中央」の碑を残しています。

東征の中で、国号を「日本国」にする考えはできていたと考えます。東征を終えた庄内平野の鶴岡で、「日本国」の地名を残しています。その後の帰還の旅は、この「日本国」の認識を残す努力をしています。



① 図のように日本国と富士山の中間に、日本平山を置き、日本国の安寧を祈っています。

② 日本国の中心は富士山という認識も記録しています。

③ さらに、日本国と富士山の間に、武尊と書く「武尊山」を置き、日本国の認識が日本武尊だったことを記録しています。

④ 日本武尊は帰還の経路を、一旦、富士山に戻り日本国方向に進み、武尊山に登っています。富士山こそ日本の中心で、尊が認識したことを登ることで強調しています。

日本書記は神功皇后の新羅出兵で、新羅の王が、やってくる船を見て述べた言葉を記しています。

「東に神の国があり、日本というそうだ。・・・」

神功皇后は日本武尊の子、仲哀天皇の妃であるので、この新羅出兵時に、日本国の名が新羅に伝わっていても、前後関係は矛盾しません。

紹介した山々は調査の一部です。このように見てくると、建国の過程が実によく記録されていることが分かりました。これを考古学で遺物から知ることは全く不可能です。古事記や日本書紀の記述と矛盾するところがありません。多くの現地伝承とも一致します。記紀が記す内容以上に、いろいろなことが分かってきました。これまで、いろいろな邪馬台国の位置論が発表されていますが、それに基づく建国の過程が、あいまいです。建国の過程を空想でしか述べられない、邪馬台国論は棄却すべき時代に入ったと考えます。

以上